

責任をもつ

2025. 9. 24

若い世代を中心に、管理職になりたくない人が増えているという。学校はどうだろうか。同じである。教頭先生になってくれる人が足りない。

ある調査によれば、責任が増えそうだからという漠然とした不安感が理由の筆頭に挙げられていた。学校の先生の場合は、責任のこともあるが、単純に業務量が多すぎる。そのうえ、子どもと一緒にいたくて先生になったのに、子どもからは離れていく。

責任を忌避する風潮には危機感をもたざるを得ない。そもそも働く人が責任を欲しようと欲しまいと関係はない。働く人に対しては、責任が要求されるものだろう。責任とは、仕事を遂行することである。組織で働く限り避けることができないものである。

教員の常識は世間の非常識という言葉がある。肝に銘じている言葉の一つである。教員は、学校のことしか知らない。どうしても視野が狭くなる。異業種の方から話を聞いたほうがよい。私の場合は、社会人4年目となる長男からの話が参考になる。息子がお世話になっている業界でも、管理職とりわけ中間管理職といわれるポジションのなり手に困っている。給与の割には、業務が増え、責任も伴うからであろう。

思うに、報酬というものは、専門性の高さと責任の重さに比例しているのではなかろうか。専門性というのは、がんばったからいいというものではない。長い時間、働いたからといって高まるものでもない。誰もがもっているものではないため、希少価値が高まる。よって、報酬も上がる。一方、責任というものは、一人の問題ではない。会社の信頼、社員の人生、社員のご家族の人生にまで影響が及ぶ。その重圧たるやいかほどのものだろう。精神的に休まることなどないだろう。報酬が高くなるのは理にかなっている。

ときに、いかにも簡単に、責任をもつとか責任をとるというフレーズを使うことがある。だが、本来は、仕事にふさわしく成長したいといえるところまで真剣に仕事に取り組むことが、責任をもつということである。このことが、若い世代には伝わっていないのかもしれない。責任をもつということは、自分が成長できるということである。責任を回避するということは、自ら成長の機会を奪っているということになる。

誰でも責任をとりたくはないだろう。できれば逃げたいだろう。人の人生にまで責任を負いたくはないかもしれない。だが、違った見方をすれば、人として成長できるチャンスでもある。自分自身を磨きたいと思っているかどうかである。自分磨きには報酬はついてこないかもしれない。その代わり、かけがえのないものを得ることができそうである。